

## 「動物介在活動に伴う気分及び生理学的な変化の検討」

研究代表者氏名 川乗賀也 (岩手県立大学、講師)、研究参加者氏名 米本清 (岩手県立大学、教授)、堀内聡 (岩手県立大学、講師)

### <要旨>

本研究では、イルカと触れ合う、一般成人を対象として気分の変化を主観的な自記式評価尺度を用いて調査する。またホースセラピーでは発達に障害のある児童を対象として脳血流の変化を測定することにより効果を評定できるかを試みた。結果、イルカと触れ合う成人では、その前後において否定的感情は有意に減少し、落ち着き感は上昇した。また高揚感は上昇していることが分かった。ホースセラピーにおいては乗馬体験のあと馬に関する絵、動画や音の刺激を提示した結果、刺激の種別により脳の血流が大きく異なることが分かった。これらの動物と人のかかわりより、近年問題となっているストレス解消のツールとしての利用及び効果的なリハビリテーションの提案ができる可能性が示唆された。

### 1 研究の概要

本研究では、動物介在活動に注目する。発達に障害のある児童・者の療育や余暇活動、あるいは健常者の健康増進法として、動物介在活動は福祉領域でも広がりを見せている。その動物の中でもイルカと馬を対象とし、動物とふれあうことによる精神的な変化と生理的な変化を評価することとした。

### 2 研究の内容

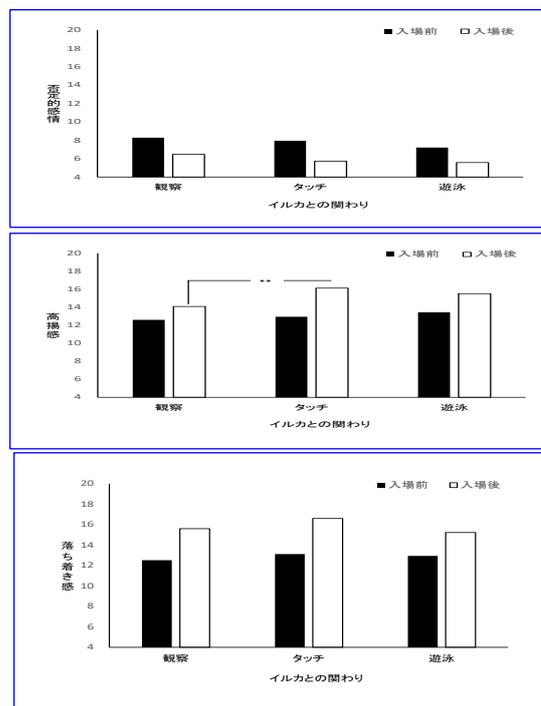
イルカ介在活動では、イルカを見る、イルカに触れる、ドルフィンスイムといった活動別に被験者の主観的な気分(落ち着き、否定的感情、高揚感)がどのように変化するかを自記式調査尺度を用いて測定した。

また馬介在活動では発達に障害のある児童を対象とし、視聴覚刺激を与えた時の脳(前頭前野)の活動レベルを客観的に評価することで、動物が与える身体的効果を推測しようとするものである。脳の活動レベルは近赤外線分光法(NIRS)により血中酸素濃度の変化を非観血で測定するもので、刺激に対する反応(時間分解能)が良いと考えられる。

### 3 これまで得られた研究の成果

イルカと触れ合う前と後で来場者 150 名の感情を調査した結果、関わりの活動種別に関わらず、否定的感情は有意に減少し、落ち着き感は上昇した。他方で、高揚感の高さは関わりの種類に関わらず上昇したが、その程度はイルカを観察した人と比較して、イルカにタッチした人で大きかった。

次に馬と発達に障害のある児童のかかわりでは、乗馬を終了したあとでも、乗馬の経験があることにより馬の画像や動画などを見ることで脳がアクティブなと考えられた。乗馬を長時間続けて行なうことはできないため、乗馬の経験をした後で、実際に乗馬をしている時間以外には、乗馬に関する映像を提示することで、脳活動が活性化する可能性があり、発達に良い影響を与えることが示唆された。



### 4 今後の具体的な展開

イルカ介在活動ではイルカと触れ合うことで、活動種別に関係なく気分が改善することが分かった。このことから今後は人のストレス解消のツールとしてのイルカ介在活動の提案及び癒しをテーマとしたまちづくりの方策について検討していきたい。

また馬介在活動においては発達に障害のある児童と健常児を比較し、より効果的に発達を促す刺激について検討していきたい。